

如何に多くの研究がなされ、如何に多くの人々が従事しているかを知ると、その味もひとしおなものに感じられた。

以 上

北海道・東北学会旅行記

京 都 か ら 函 館 ま で

大食四 市 原 京 子

8月1日 一行は午前7時、制服に身をととのえて京都駅東出口に集合。8時2分発北陸線まわりドン行で、いよいよ出発となつた。「気を付けてね」「ナマ水を飲まないでね」「おみやげたのんだよ」と見送りも盛んながら、車内もラッシュアワーとあつて、席を確保するのに大さわぎである。

幸い天気はあまりよくなく、窓のシャドーは不要、車窓より涼しい風が流れこむ。米原を過ぎる頃通勤客も減り、天下大平の京女専用列車となると、あちこちから歌が出る、笑いがおこる、それにもちろんタバモノが出る（専門ですもの）。しかし敦賀で、機関車がディーゼルから煙をはくのと取り替えると、そう安心して楽しめなくなつた。進行方向に顔を向けて坐っている者はトンネル接近予報係り、その他の者は窓の戸を上げ下げする係り。

こうして、大して珍らしい眺めもない北陸本線から羽越本線へと、歌とおしやべりとタバモノを乗せて青春列車は広い越中、越後平野の青田を走り、日本海の波のそばを走り過ぎた。やがて黒々とした海の向うに夕陽は沈み、車内も夜となつた。しかし、暑さのためか、旅慣れないためか、夜遅くまで皆眠れず、モソモソ動いたり、ぼそぼそしゃべつたり、その騒音がまた眠らんとする人のじやまになる。やつと皆が睡眠のこつを覚えて、ひたすら眠り始めたのは、夜も白々と明け初める頃だつた。

8月2日 朝5時 とある駅でいつせいに洗面をするため、ホームに飛び出す。20時間のスス焼けの顔を冷水に洗い、ふと見上げる東北の空は澄み、秋を思わせる空気の感触だつた。汽車はさらにそこから5時間半、庄内平野、秋田平野を走つた。田んぼにはよう

やく穂の出そろった稲に朝つゆが光っている。この当りは早稲はあまり見られない。昨日通った石川県はかなり早稲が見られ、稲穂がもう色着き始めていた。そこから北へ進むにつれて早稲は少なくなる。

10時33分、ついに秋田県の大館に着いた。すぐにそこからディーゼルカーに、罐詰のオイルサーデインの様に詰めこまれて、十和田南に向う。一時間ほどで十和田南に着くと、すぐに三台のバスに分乗し、十和田湖畔へと一時間余りバスにゆられた。青い湖、澄みわたつた空、湖面を渡る涼風が、一昼夜を経て旅慣れた身に、初めて旅の味わいを知らせてくれた。和井内貞行がヒメマスを北海道の支笏湖からこの湖に移したという苦労話を語るガイド嬢の声は、いつか子守唄となつていた。昼食は、湖の岸辺にある休屋というところの休憩所で取つた。食後その当りを歩いてみると高村光太郎の刻んだ裸婦像があつた。

あまた 天下りしか
みな 水沫 凝りしか

あわれいみじき湖畔の乙女

二人向いあつて鏡の様な湖面に神秘的な姿を写すこの裸像を歌つた歌は、さつそく私達の愛唱歌となつた。

午後は休屋から湖上遊覧の船に乗つた。強い夏の午後の陽は、それでも冷い風と調和して、陽なたぼつこにちょうど良いくらいの気温だつた。船は岸沿いに、波ぎわよりそそり立つ岩壁を仰いだり、小さな島の間を縫つて通り、私達を楽しませてくれた。ガイド嬢の説明に皆は静かに耳を傾けていた。夕方3時船は鉛山の船付き場に着いた。船付き場から十和田ホテルまでは登り坂を五分くらい歩いた。長い汽車の疲れが、足どりを重くした。

山小屋を思わせる様な丸太作りの外観をしたこのホテルは、湖を一望にする高い丘の上に建つていた。二日ぶりを足をたたみの上になげ出して一休みすると、車中の煤煙で汚れたブラウスや靴下を洗濯するのに大さわぎ。たちまち物干し場は万国博覧会の旗が並んだ様ににぎやかになつた。夕食は大広間に集つて、夕陽に映える空と湖を眺めながら、東北の味をかみしめてみた。(ごちそうに何が出たか、さすがの私にも気遣がない)。観光に名の売れたこの地方ではあるが、ここ十和田ホテル周辺は、ほとんど人の気配のない静かな感じで、しかも旅館の内部はきれいととのつていて、旅愁を味わうには十分である。

夜、部屋の手摺にもたれて、じつと湖を見つめてみた。ひんやりとする風は、葉ずれの音を誘つて初秋を思わせる。湖は白から銀色にまた鉛色にとまどろむ様に空の闇の中に消えて行つた。秋虫が鳴いている。

8月3日 ゆつくりと休んだ朝は、深い谷底から浮び上つて来る様に目覚めた。湖は再び銀色に光っていた。

朝食後もゆつくりと休み、10時30分、曲りくねった坂道をバツクで登つて来てくれた三台のバスに分乗して奥入瀬溪流に向つた。

高いところから夕べ眺めた湖のほつりを、天下りしか水沫凝りしか……とあの歌を歌いながら、ガイド嬢の声に身を傾けながら快くバスにゆられて行つた。

いよいよ溪流にさしかかる。車の左下を浅い川が流れていた。大きな岩々や木々の間を縫つてゆつくりと進む清冷な流れは、水の底まで青くすき通つて見える。岩をすべり落ちて白く泡立つ水の音がエンジンの音を忘れさせるほど、山の冷氣といつし上に心の中に浸み通つて来る。車の左は高い崖になつていて数々の滝が流れていた。白い絹糸をかけた様な滝、水晶の玉がころげ落ちる様な滝。

皆さま左をごらん下さい……右をごらん下さい……。と滝の名や流れの中に岩の名を示されて忙しかつた。皆さま、間もなく大変高い橋を渡りますからお見のがしなき様。渡ります橋は百両、その下の流れが千両、その流れの中の岩は万両、合せて一万一千百両でございます。自然に作られたものとはいえ、岩の配置といい、その岩をすべる水の姿といい、流れにさしのべられた木々の枝といい、そのまま名園の味わいがあつた。十和田湖に端を発して太平洋にそそぐこの流れに沿つて半日過し「葛温泉」で昼食を取ると、午後は八甲田山のふもとの高原を走つた。「皆さま、峠というものは、まことに神秘的なものでございます。そこを越えると、全く別の世界が開けて来るのでございます。」グッドタイミングなガイド嬢の言葉が切れた一瞬バスは峠を越えて、目前に、やわらかいクレパスを思い切りのばして描いた様な広い広い緑の高原が開けて来た。青い空、白い雲、牧場の緑、草をはむ馬の群、私にはこの旅行中の忘れられない景色の一つになるだろう。車を降りてそこに遊んだ20分は本当に楽しかつた。

山から下り、青森市街に入つたのはもう夕陽にむせかえる頃だつた。折よくバスは名物のねぶた祭りにぶつかり、車中より見物した。太鼓の音が街中に響いて活気があつた。青森駅で一時余り行列を作つて乗船を待ち、5時20分、船は棧橋を離れた。四方を海にかこまれた日本でも、船で旅行することは少ないせいか、皆はいつせいにデッキに出て、子供が汽車に乗つたときの様にはしゃいでいる。上甲板に出てみると、カモメが舞いながら船を追っている。青森港はもうはるか点描画の様に見える。赤い西の空を背景に津軽半島が黒々と横たわっている。舷からわいて来る様な白い泡が、黒い波の上へすべつて消え

て行く。

船の中では、横になつて静かに目をとじている者や、トランプに興じている者、「彼」の予想をトランプでうらなつてゐる者等。波も静かで、船酔いする人もなく無事に四時間を過した。9時もまわつた頃、船は北海道の表玄関函館に近付いた。真黒いビロードのスクリーンに、色とりどりの星を張りつけた様にネオンサインの美しく光る港の中へ、船はしだいにエンジンをゆるめながら、ゆつくりと入つて行つた。今夜は函館の郊外温泉町湯の川温泉で北海道の一夜を迎える事になる。

札幌から網走まで

大食三 弘田勝子

なつかしの京都をあとにして、まだ四日しかたつていないというのに、円山公園という言葉を開いただけで、はや胸の迫るような郷愁を感じました。長かつたドンコウ列車から解放されて、久しぶりにナイフとフォークで旺盛な食欲を満たすや、一風呂あびて、旅の疲れを吹きとばすと、三々五々と連れだつて四条河原町ならぬ札幌の大通りへと吸いこまれて行きました。札幌の町も又京都と同じく碁盤の目のように区画されていて、その街路の両側に茂るアカシヤの並木や大通の花壇、大芝生、そびえたつテレビ塔等には、どこかしら近代的なムードがあふれていました。円山ハウスのようなユース・ホステルは、私達若人にとって、非常に魅力があつた。梯子をのぼつてベツトの中へもぐりこみ、なつかしい故郷の父母や友へのたよりに余念のない人、又日頃のお行儀の上さを発揮して下の人に叱られる人、カーテンから首だけをのぞかせて話をしている人等皆それぞれに楽しい一夜を過ごしました。翌朝、北海道ならではのおいしい牛乳で咽をうるおし、旭川へと向つた。旭川では、私達京女生とゆかりの深い朝倉先生にお会いし、京都での想い出話に花が咲き、何かしらまだ夢のようで北海道へ来ているという実感がわきませんでした。旭川からのバスは天井がほとんどガラス張りになつていて層雲峯の岩々を見ることができるよう設計されていきました。層雲峯への道すがら、はかなくも美しいアイヌの悲恋伝説にうつとりしていると、いつしか窓外の景色は男性的な雄狂な眺めとなつていた。大雪山の北東に